

【書評】

岩崎正弥・高野孝子著『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈』農文協 2010年

今里 佳奈子

Kanako Imasato

現在、多くの地域で、「地域の死」が危機感をもって語られている。明治期に始まった都市への人口移動は、高度成長期には爆発的に加速化して「過疎化」をもたらし、地域の経済を空洞化し、地域の自尊を傷つけ、そして地域の疲弊を招いた。

このような現状を変え地域を再生する切り札として本書が期待するのが「教育」である。ただしそれは、明治以降の近代日本の学校教育、つまり、「地元を捨てさせる教育」ではない。そうではなくて、「場の教育」＝「地域に根ざす土地に根ざした学び」こそが地域と教育を再生する。これが本書の主題である。

本書は、これまで「地域」と「教育」に、様々な形で関わってきた岩崎正弥氏と高野孝子氏の共著である。このうち岩崎氏（第一部）は長年農本思想について研究してきた研究者であり、単著『農本思想の社会史—生活と国体の交錯—』（京都大学出版会1997年）では、ともすれば日本・ファシズム・イデオロギーとの関連でとらえられがちだった農本思想を、生活世界という分析視角からとらえる新たな機軸を打ち出した。氏の執筆による第一部「場の教育の可能性」では、このような氏の思想史研究を踏まえた「地域再生」の理論が展開されている。一方、高野氏（第二部）は、北極海を世界で初めて無動力（犬ぞりなど）で横断するなどわが国では冒険家として紹介されることが多いが、長年にわたり環境教育の活動を展開してきた野外・環境教育活動の実践家である。氏が執筆する第二部「場の教育の実践」では「TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校」の実践活動を紹介する中で「場の教育」が地域に一体何をもたらすかを論じている。

内容に入ろう。本書の主題は、地域再生の切り札としての「場の教育」である。その際、著者はどの

ような「地域像」を思い描いて「場の教育」を論じるのだろうか。一言で言えば、それは、多様な地域があるがままの姿で認められる、自律と連帯に基づく「地域」である。大事なものは「自立」よりも「自律」であり、また地域の「存在価値」を自覚すること（地域の存在論の確立）である。著者の念頭にあるのは、そのような存在論に基づいた、特に都市と農村の間の「相互依存関係」（自分を大切に、かつ相手にも敬意を払った関係）に基づく地域圏の確立。例えば「新しい公共」を体現する生活空間のなかで、連帯において生存がまず保証され、自律において市場競争に参入できるような仕組みが一定の地域圏で確立されるというような地域像である。実は、近年、暴走するマネーに対抗して、地域では手づくり地域経済（地域通貨、コミュニティビジネス、NPOバンク、1%条例）が芽生え始めているし、水源税のように下流部が上流部を支え、他方で上流部も下流部の支援の上に立って資源の価値化を通して自律をはかるような動きもある。「自律と連帯」に根ざした「地域再生」の条件が成熟しつつあるかもしれないと、著者は期待する。

そして、その実現のための切り札になるのが、「場の教育」である。「場の教育」、つまり「地域における、土地に根ざした学び」は、岩崎氏によれば「地域に目を向け、地域の再生を担う主体的・再帰的な学びと活動の方法」、すなわち、「地域に学び、学びの主体が変えられ、今度は地域づくりの広い意味での担い手として、地域に働きかけ地域を変える」という一連のプロセスである。岩崎氏は、これを、<認識としての場>と<構造としての場>という2つの「場」の関係性によって説明する。すなわち、地域に学ぶ（「根っこ」を掘り下げていく）ことによって、ただ目の前にあるだけ（間近）の「他人事

だった無機的な地域」は、身近な「自分事としての意味ある地域」に一変する。これが<認識としての場>の発見である。そして<認識としての場>を発見した人々（「場を持つ主体」）は、次に<構造としての場>（場所環境がもつ固有の雰囲気）をそれにふさわしいものに変えるための動きを始める（「地域そだて」）。「場の教育」を通じて、多数の地域のプレイヤー（「場を持つ主体」）が生まれ、このような多数のプレイヤーが「地域そだて」を実践していくことで地域は変わっていくというのである。そしてそこでは、「土」の教育力＝「農」が重要な役割を担う。「農」は、地域空間とそこに流れる時間軸において人と自然が、また自然を介して人と人が交わる関係の総体そのものだからである。

以上のような第一部、理論編を受け、第二部では、「TAPPO南魚沼やまとくらしの学校」事業における実践論が展開する。2007年に「小学校を守りたい」との声がきっかけで始まったこの事業は、「なめこのコマ打ち」（交流事業「やまざとワークショップ」）に始まり、「田んぼのイロハ」「棚田草刈りアート日本選手権」など、3年間で80本のプログラム、1700人の参加者を得た。てづくり郷土料理の提供から始まった「栃窪かあちゃんず」も小規模ビジネスとして本格展開しつつあり、交流や自然を通して「活気ある村」にしていきたいという魚沼の人々の願いは、「場」をもつ多様なプレイヤーの自律と連帯の「地域そだて」の中で少しずつ形になっているようだ。高野氏が「農山村」にこだわるのは、岩崎氏同様、「農」や「土地」に特別な価値を見いだすからである。氏によれば、「農山村」は、まさに「人間がほかの命に支えられて生きていることを身体感覚をともなってもなるとらえることができる場所」である。3年間の事業経験を経て、集落には、「元気と活気」が戻ってきているという。若者や女性の参加が増え、夢や希望を語る人たちが増え、そして地域内のつながりが新しく生まれ、環境に対する意識も変化してきた。

以上が本書の内容である。本書の第一の特色は、思想史研究者である岩崎氏と環境教育活動家である高野氏の共著であることで、理論面においても実践面でも厚みのある内容になっていることである。理

論面においては、あるべき「地域再生」の方向が明確に示されるとともに、それを実現するための「場の教育」が論理的に語られる。実践面においては、「地域そだて」の具体的な実践活動が詳述されるとともに、それらが繰り返して「場の教育」の理論と結びつけ論じられることで、理論と実践の橋渡しが行われている。

二つ目の特色は歴史から多くを学ぶことができるということである。紙幅の関係で紹介することはできなかったが、第一部第二章「土地に根ざした教育の歴史に学ぶ」においては、大正から昭和にかけて展開した「土地に根ざした教育運動」の3つの潮流が詳細に論じられている。その中では、石川三四郎の「複次網状組織論」（異質な原理を包摂する多様性にあふれたネットワーク型連帯論）、「島村郷土読本」にみる教育実践、賀川豊彦の立体農業論（理想的農村社会の運営に至る総合的農業経営法）、そして百姓哲学者、江渡狄嶺（えとてきれい）による「場」の発見と単校教育論（家・村と一体化した学校）、私と公の相互関係において立ち上がる「新しい公」の構想なども論じられており、現代社会に生きる我々もそこから多くの示唆を得ることができるのである。

愛知大学地域政策学部は、「地域貢献力」をもつ人材の育成を目標にしており、ここでは「地域」や「地域貢献力」が何を意味するのが、常に問われることになる。本書は、<認識としての場>を発見した「場をもつ主体」が「地域そだて」に関わることが「地域再生」につながると論じるものであった。このような本書の立場からは、<認識としての場>を発見する力、「場を持つ主体」となる力こそが「地域貢献力」であるという一つの説得力ある答えを得ることができるように思われる。「場を持つ主体」の育成には「場の教育」が不可欠となる。「場の教育」としての「演習」や「地域貢献活動」を通じて理論と実践の橋渡しをし、「場を持つ主体」となる力を育成する。本書は、我々にとって、このような「地域貢献力」の教育論としての意味ももつものでもある。

受稿：2012年7月6日

受理：2012年7月13日